

岐阜県白川村立白川郷学園コミュニティ・スクールの実践 —学園・家庭・地域の協働による将来の「担い手」・「創り手」育て—

新谷さゆり¹⁾・益川浩一²⁾

¹⁾白川村教育委員会事務局（〒501-5507 大野郡白川村平瀬126-11）

²⁾岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜市柳戸1-1）

1. はじめに

岐阜県の北部に位置する白川村の地形は、南北に長く、集落が幾つかに分散されている。最も北に位置する集落の児童生徒数数は、富山県の学校に通う。村の中央、更に南の集落の児童生徒は、村の中央に位置する白川村唯一の義務教育学校、白川郷学園に通う。平成3年度までは中学校2校、小学校2校であったが、児童生徒の減少により平成4年度に中学校が統合、更には平成23年度に小学校が統合し、中学校舎に隣接した新校舎と共に小中一貫教育校がスタートした。その後、平成29年4月より現在の義務教育学校となった。

時代の移り変わりと共に現状に合った学校教育環境へと変化してきたが、その道のりは決して順風満帆ではなく、特に学校統廃合については地域感情が大きく揺れ動いた。平成23年度の小学校統廃合の際は、中学校統廃合に続き小学校も失うこととなった南の集落では、学校に対する熱量が下がり、地域教育力と共に地域力も低下する心配がみられた。村内唯一の学校で村の未来に繋ぐ教育を進めるためには、これまで以上に地域教育力が必要となり、更に地域の活力は最も重要であり、そのためには、学校のコミュニティ・スクール化は不可欠であった。

本稿では、地域教育力再向上をめざした、更に将来の担い手を学園・家庭・地域が協働で育むことをめざした、白川郷学園コミュニティ・スクールの取組を報告する¹⁾。

2. コミュニティ・スクール準備段階

平成23年4月、新たにスタートした小中一貫校では、小学校統合1年目ということもあり、地域と学校のかかわりは少なく、1年間を通して授業等にかかわった地域の方は2名であった。当時の学校においては、特に地域とのかかわりが不可欠ではなかったため、多くの教員がこの点については無関心であったが、統合前の2小学校より継続勤務の教員は、大きな変化として問題視していた。そこで翌年平成24年度より、地域と学校がつながる教育のあり方が考えられた。

2-1. 「地区の子」目線でのかかわり

学校統廃合による地域感情が揺れ動くなか、学校教育のなかに取り入れる地域とのかかわりの内容は、要検討課題であった。特に地区の小・中学校も失った南部地区（南の集落）にとっては、お手伝いレベルで学校に足を運ぶことは考えられず、必要性や価値がある内容であることが重要であった。そこで地域連携担当教員と社会教育主事の連携協働により、学校の体育大会に郷土民謡を取り入れた。本村には、岐阜県重要無形民俗文化財に指定されている郷土民謡「こだいじん」がある。この民謡は、4地区の民謡保存会によって継承されており、お囃子や唄は同じであっても踊りはそれぞれの地区によって異なる。どの地区も伝統芸能として子どもたちに継承していきたいという願いは強いが、児童生徒が地区のなかで民謡にふれる機会は少ない。当時（平成24年）の調査で民謡を踊ったことがある児童生徒の割合は、「南部地区84%」「荻町地区18%」「鳩谷地区22%」「飯島地区4%」であり、全体の31%ほどしかいなかった。

そこで、郷土民謡を学校教育の場に取り入れ、どの子も漏れなく自分の地区の踊りに触れる機会をつくった。「我が地区の子」に伝承したいと願いかかわる地区の方は多く、3回行った練習会には、地区ごとに5～10名の方が指導にかかわった。校内4つの会場でそれぞれの地区に分かれて練習を行ったが、当日は、民謡保存会連絡協議会の協力により、生演奏で一斉に地区ごとの踊りを披露することができた。会場に訪れた保護者や地区の方も自分の地区の踊りの輪に加わり、子どもたちと共に踊りを楽しんだ。



図1 郷土民謡練習

この取り組みに一番驚いたのは、教員である。

多くの村民が学園へ足を運び、熱心に子どもたちに指導する姿。体育大会のほんの一コマのために、生演奏をされる保存会の姿。子どもたちと共に輪に加わり踊りを楽しむ保護者や地区の方の姿。何より笑顔で楽しむ児童生徒の姿に多くの教員が心を打たれ、地域が学校教育にかかわる価値を感じたのである。

更にこの取り組みは、地域社会のなかでも大きな影響を与えた。観光地で有名な荻町地区では、学園での民謡指導にあたった方の声掛けで、夏休み期間中にラジオ体操のあと民謡練習が行われた。

「我が地区の子」に民謡を上手になって欲しいと願い、普段は参加しないラジオ体操に出向き練習を行った。また学校統廃合により地域力低下が心配された南部地区では、地区の祭礼に向けて子どもたちに「こだいじん」以外の民謡も教え、「我が地区の子」に多くの伝統芸能を継承したいと願い、地区の舞台で披露された。



図2 ラジオ体操後の民謡練習

体育大会に郷土芸能を取り入れたことにより、このような地区の方の主体的な活動が見られ、地域教育力向上のワンステップとなった。また、体育大会後に調査したアンケートには、「学校が遠くなってしまい自分は何も役立てないと思っていたが、今回子どもたちと共に出来たことはとても幸せだった。」「子どもたちに指導する機会がもらえ自分も良い勉強になった。」「一生懸命な子どもたちの姿を見てまた次回も来ようと思った。」など、地域の方の自己有用感の高まりを感じる記述があり、ここでも地域教育力向上に繋がる傾向を感じた。

更にアンケートの中には、「近所の子どもたち以外であまり話すことのない子どもとも親しく話せるようになり嬉しく思う。」「今まで話したことのない子どもたちが、『こだいじんを教えてください』と声をかけてくれて嬉しかった。」「日常のなかで子どもたちと挨拶をするようになった。」「民謡を覚えて家族との会話が増えたと聞き嬉しく思えた。」といった記述があり、日常生活での人とのかかわりにも大きな変化が見られたことが分かった。

一方、児童生徒のアンケートには、「地区の踊りを知らなかったので踊れて良かった。」「自分の地区の文化を改めて知ることができた。」「遠いところから自分たちのために教えに来てくれたことが嬉しかった。」など、郷土民謡の取組に満足する記述が多いなか、「他の地区の踊りも気になった。」「他の地区の踊りも踊ってみたい。」「共通の唄やお囃子をやってみたい。」「全体で一緒に踊りを踊りたい。」といった、地区を超えたかかわりを求める記述があった。

このような思いは、統廃合により地区を超えて共に学校生活を送っている子どもたちにとっては普通のことであり、「地区の子」目線の大人の考え方とは大きく異なっている。学校教育のなかに地域教育力を取り入れていくためには、子どもたちの願いに添う大人の考えが重要であり、「地区の子」目線から「学園の子（村の子）」目線でのかかわりができることが求められる。そのためにも学校運営協議会の役割は重要となっていった。

2-2. 「学園の子（村の子）」目線でのかかわりをめざす準備

郷土民謡の取組後、平成25年度に向けて学校運営協議会を設置する準備が進んだ。準備委員会を立ち上げる前に、学園管理職と学校評議員の一部、教育委員会事務局担当者で学園や子どもたち、村の現状について話し合った。これは、学校運営協議会を設置する目的を明確にするためである。話し合いでは、主に以下の内容が出された。

- ・学校統廃合による地域教育力低下→地域の子を地域で育む意識低下
- ・子どもの教育は学校任せ→家庭教育力低下・学力低下
- ・教職員の多忙化
- ・学園の地域離れ→村民とのかかわり不足（信頼関係）
- ・観光地化による安全面に対する心配
- ・人口減少→担い手不足、継承者不足
- ・5年後、10年後の村の姿が見えていない、もしくは見ようとしていない

学校統合間もないこともあり、地域教育力低下や学園の地域離れの問題が真っ先に出されたが、最も意見が集まったのは、人口減少による担い手不足、継承者不足である。更にその現状に気づいていても、将来の村の様子を村民が具体的に見つめ考えようとしていないことが出された。この現状を見つめ、将来の白川村が持続可能であるためには、未来に繋がる子どもたちの育みが重要であることが明らかとなった。その育みには、学校、家庭のみならず村全体でのかかわりが必要であり、そのパイプ役として学校運営協議会を設置することは最適であると意見がまとまった。



図3 第1回準備委員会での熟議

学校運営協議会設置に向けて、準備委員会を立ち上げる際に最も配慮したことは、委員選定である。「地区の子」目線から「学園の子（村の子）」目線へと地域の意識を変えていくためには、全地区、老若男女、は勿論のこと、地域づくりや学校教育への熱意の高さ、何より子どもを核とした考え方が出来ることを重要視した。

第一回準備委員会では、めざす姿を明確にする熟議を開催。初めての熟議に戸惑いを感じながらも活発な意見交流がなされ、この日、明確になったことは、学校教育目標「ひとりだち ～自立・共生・貢献～」が地域の願いと共通であることであった。願いや想いを教員と共に語り合うことで、委員（地域の方）の当事者意識が高まり、その後4回の会議では、地域としての役割、具体的な活動案、組織のあり方など、積極的に話し合いがなされた。組織についての話し合いの際には、絵に描いた餅にならないよう、実働部隊としての部会設置案（学校支援部、地域活動部）が委員から出され、「地区の子」目線から「学園の子（村の子）」目線への移り変わりが感じられた。

平成25年10月、白川郷学園に学校運営協議会が設置されコミュニティ・スクールが誕生した。

3. 「学園の子（村の子）」目線をめざした取組

準備委員会の委員を学校運営協議会委員にスライドさせたことにより、これまでと同様、委員の意識は高く、志も共有されておりスタートはスムーズであった。

第一の課題となったのは、村民の学園離れである。「地区の子」目線の温かさを大切にしつつ、「学園の子（村の子）」目線へと意識を広げるために様々な取組が実践された。

3-1. 学校支援部の取組

〈村民データベース作成〉

多くの村民が学校教育にかかわれるよう村民データベースの作成を行った。村民の知恵や技を拾い出し、教科やクラブ活動、ふるさと学びなど、様々な場にかかわることのできる人材を整理した。全ての地区の村民が対象となるため、かなり手間のかかる作業であったが、初の全地区村民データベースが完成した。しかし、部会部員が選定した人材を整理したのみで、本人の意思確認等はなされていなかったため、活用する際は、教員が要望する人材を学校支援部が取り繋いでいた。

実際に小学校（平成29年度より前期課程）のクラブ活動では、データベースより講師選定された11名の方が指導にかかわった。また、学園が人材活用授業計画を作成し、年間に渡り全ての学年の教科に村民がかかわれるよう計画的に進められた。

特別支援学級の生活科「ぞうりづくり」を指導された方は、南部地区の年配者であり、学園へ初めて足を運び、子どもたちと笑顔で活動されるその姿からは、これからの村の教育に大切なことを感じさせられた。



図4 村民が指導にかかわるクラブ活動

〈白川びとから学ぶ場づくり〉

大人の生き方や考え方などを子どもたちに伝える場づくりとして、授業とは別に昼休みや放課後などの短時間で講座が開催された。起業された方、消防団、雅楽演奏者など、様々なジャンルの大人の姿から「生き方学び」をして欲しいと願っての実践である。チーズケーキで起業された方に対して「僕は今年受験生です。今日の話聞いて何のために高校に行くのか、もう一度親と話したいです。」と生徒が語った。また、雅楽を知らない南部地区の生徒は、他地区の伝統の素晴らしさを感じ取り、子どもたちの「地区目線」が「村目線」へと広がる学びとなった。



図5 白川びとから学ぶ場

3-2. 地域活動部の取組

遠く離れた学園に足を運べない村民にとっては、やはり「地区の子」目線が主流となる。子どもと大人のかかわりの場は決して学園のみではない。むしろ、地区のなかでのかかわりが重要である。しかし、学校統合により子どもの姿を見る機会が少なくなったと感じる村民は多く、「子ども」＝「学園」の志向が強い。そこで、地域活動部では、「地区の子」目線の温かいかかわりを地区のなかに位置づける取組を行った。これは、学校や地区といった場所を核にした志向ではなく「子どもを核」とした志向へと変化していくことに繋がる。

〈一斉美化運動〉

毎年開催される村内一斉美化運動での子どもと大人のかかわりづくりに取り組んだ。既に位置づいている行事のため、村民の参加率は高い。この場を活用して、子どもたちへの声掛けを呼びかけた。良さを認める声掛け、感謝の声掛けなど、地区の大人に愛され育つ環境づくりを願った。子どもたちと共に清掃活動することはこれまでと同様だが、共感すること、言葉で伝え合うことを大人が意識することで活動の価値が更に上がった。「〇〇くん、助かるわ」「さすがだね」「ありがとう」などの大人の声掛けに照れ笑いしながら、子どもたちの表情から自己有用感の高まりが感じられた。日ごろよく使われる「ふれあう」「かかわる」「共に」などの言葉は、実は分かりにくいことであり、「声掛けをする」といった具体的な姿で示すことが村民の教育力向上につながると感じられた。



図6 村内一斉美化運動（声掛けを周知）

〈登校ふれあい週間〉

地区の中で子どもを見かける一番の機会は、登下校時である。そこで登校時に多くの村民が子どもたちに朝のあいさつや声掛けをする週間を設けた。全戸配布するチラシには、徒歩通学で通過する場所と時刻、バス通学のバス停と時刻を掲載し、具体的な声掛けの例も載せた。更に登下校を見守るボランティアを呼び掛け、全地区に配置した。バス通学となった南部地区では、バス停で子どもたちを見送る大人の姿があり、その後、毎日見送る習慣となった。また、徒歩通学する地区では、畑や家の窓から気軽に声掛けする姿もあり、大人の意識向上が感じられた。



図7 登校バスを見送る村民

3-3. 学園・学校運営協議会の取組

〈地域ボランティア募集〉

学校運営協議会では、学校支援部作成の村民データベースを確かなものにするために、村民からの自主的なボランティアを募集した。全戸配布したチラシには、具体的なボランティア内容を掲載し、多くの村民の教育力が学園に取り入れられることを願った。しかし、2年間の募集で集まった申し込みは、0（ゼロ）。村民の特徴として、自らの志願を苦手とする傾向があり、声を掛けられれば力になってくれる方が多いため、募集を中止し、地道な声掛けによる村民データベース構築に努めた。

〈地域公開日〉

学園では、多くの村民に学園の様子を見てもらうために、「地域公開日」を設けた。またその際に、子どもたちと大人が語り合う「子ども未来会議」も開催された。学校運営協議会では、学園までの移動手段が無い方のために旅館に送迎バスを依頼し、当日は南部地区の多くの年配者が利用され、土曜日開催であったことや学園への興味関心などもあり、全ての地区の村民が学園に足を運んだ。参観後のアンケートは全て好評であった。「全教室をのぞかせていただきました。初めての訪問です。子どもたちのいきいきとした姿に感心、圧倒されました。見学に来て良かったです。一貫校の内容も分かりました。」

こうした南部地区の方の記述から、「学園の子（村の子）」目線への広がりを感じられた。



図8 地域公開日「子ども未来会議」

4. 「目的や願いの共有」：本当のスタート

様々な取組により、村民の関心は学園に向き始めた。学園離れしていた村民の足は次第に学園に出向くようになり、園内で村民に出会うことは日常的になった。学校運営協議会の振り返りには、村民の意識の変化と地域教育力向上が成果としてあがり、「地区の子」目線から「学園の子（村の子）」目線への移り変わりが感じられた。

一方、教員の振り返りには、村民の来園者数が増えたことや、民謡などの指導への感謝の記述が多く、それによる児童生徒の成長や変化についての内容は無かった。更には「学校運営協議会の取組そのものが理解しきれません」「地域とのかかわりはよく分かりません」といった記述があり、村民と教員のベクトルが揃っていないことが浮き彫りになった。この要因は、教員への説明不足と目的や願いの共有を怠ったことである。更には、「目的」と「手段」が混同していたことも要因であり、多くの村民が来園することを先ずは「目的」としてめざした結果である。学校運営協議会では、直ちに教員とのベクトルを揃えることが課題とされた。

4-1. 目的の明確化

学校教育目標「ひとりだち」をめざす根本は、白川村の未来に繋がる将来の担い手を育てることである。しかし、それぞれが思い描く担い手像が一致していない。そこで学校運営協議会では、「担い手」の具体的な姿について熟議された。担い手＝帰村者のイメージが根強いなか、「帰村しない若者は担い手ではないのか」といった議論がなされた。帰村は手段であって目的ではない。目的を持って帰村できる若者を育てることが担い手育てである。また、帰村出来ない環境であっても、村を愛し貢献出来る若者も担い手として育てたい。多くの意見の中で明確になったことは、「愛郷心と貢献」である。「ふるさとへの熱い想いを胸に白川村に貢献出来るひと」を担い手として育てる。最も望むことは、熱い想いをもって貢献出来る白川びと（村民）となることである。その手立て（「手段」）として重要なことは、多くの村民（大人）とのかかわりによる経験や学びであり、知る覚えるのレベルではない、「感じ得る」ことだとされた。また、村内に高校が無いため、多くの子が15歳で村外に出る。故に15歳までの経験と学びが担い手育ての肝となる。

この熟議の内容は、村広報で全戸に周知され、教員には年度初めに丁寧に説明された。更に学園全教員と学校運営協議会委員の熟議を開催し、具体的な手立てが打ち出された。目的が明確になった教員は、地域とのかかわり方のアイデアや、子どもの学びに必要な地域力を積極的に意見として出し、これまでの活動ありきだった内容や、人を呼び込むだけの行事などは全て見直された。

平成27年、白川郷学園は、真のコミュニティ・スクールとしてスタートしたといえる。



図9 学園全職員と学校運営協議会の熟議

4-2. 社会教育関係団体との目的共有

将来の担い手を育む場は、学園のみならず地域社会でのあらゆる場に位置づけられる。地域活動部では、日常のなかでの大人と子どものかかわりや声掛けを進めてきたが、更に子ども会や女性会、社会教育委員会、公民館運営委員会など、各地区の社会教育関係団体とも目的を共有した活動推進を図った。各団体の代表者、学校運営協議会、教員との拡大熟議により、村全体で担い手を育むベクトルを揃えた。また、社会教育主事より地域における担い手育てのポイントが4つ提示され、既存活動の創意工夫が呼び掛けられた。

- ・行事の中で大人と子どもと一緒に活動する場をつくりましょう
- ・子ども達に積極的に声を掛けていきましょう
- ・子ども達が挑戦できる場や働ける役割をつくりましょう
- ・大人がいきいきと楽しく真剣に活動する姿を見せていきましょう

任期による委員入れ替わりが多いため、目的共有と手立ての確認は毎年行う必要があり、社会教育委員会が主となり、年度初めの社会教育推進会議にて全団体の委員に周知されるようになった。



図10 社会教育推進会議

5. 担い手育ての事例

〈地域公開日〉

コミュニティ・スクールスタートの年から継続開催されている。当初の村民多数来園をめざす目的とは異なり、子どもたちと共に村の未来を考える場などが位置づいた。議題は9年生のふるさと学びの題材によって毎年異なり、生徒が主体となった話し合いがなされる。参加された村議会議員のアイデアにより、ここで出された意見を基に9年生による議会提案の場が位置づく発展となった。コロナ禍で多くの人が集まれない状況であっても、生徒の学びに合わせた人選を学校運営協議会が行い、人数制限のなか、子ども未来会議は開催された。



図11 9年生議会提案

〈白川びと学〉

学校支援部が主体で行っていた「白川びとから学ぶ講座」は、キャリア教育として各学年年間2時間の授業に位置づいた。大人の思い付きで行っていた15分講座は、子ども達の未来に繋がる授業へと変化したのである。担当職員からの授業のねらいや希望内容を受け、学校支援部が講座講師を選任し、取り繋ぐ。ここで活用されるのが、村民データベースである。時を経てデータベースの質が高まり、教育の場に活かせる地域力が明確になってきた。

5・6年生の授業では、白川村の自然を活かし新しい仕事を立ち上げた起業家の話を聞いた。村の自然をこよなく愛する講師からは、自然豊かな白川村への誇りを感じ得られ、更に、その自然を仕事に繋げ村に新しい職種が誕生したことは、子ども達にとって新鮮な学びとなった。「担い手」育てとして未来の「創り手」となる志向を育むことは重要であり、村民データベースにも起業家の名前が増えている。



図12 白川びと学（起業家の話）

〈登校ふれあい週間〉

朝の登校時に子どもたちにあいさつや声掛けをする地域の方が増えてきた頃、地域活動部では「大人の満足になっていないか?」「子どもたちはどのように思っているのか?」といった活動を見直す話し合いがなされた。そこで児童生徒会のあいさつを担当する委員会と地域活動部の話し合いの場が設けられた。「声をかけてもあいさつをしない子がいる」と言った大人の見解に対して「しないのではなく、苦手なんです」と生徒が返した。この発言により気づかされた大人は、会釈や手を上げるなど、様々なコミュニケーションの方法を子どもたちと共に考えた。また、子どもたちと一緒に作成したチラシを全戸配布し、子ども達の想いやあいさつの方法を村民に伝えた。ある部員からは、「日常や地域行事でのかかわりにより、子どもからのあいさつが増えた。朝の一コマだけに特化することではない。」といった意見もあり、社会教育関係団体の行事や活動の大切さも周知された。



図13 あいさつについての意見交流

〈学年コーディネーター配置〉

平成29年度に義務教育学校となった際に、これまでのふるさと学習のカリキュラムが見直され、新たな教科として誕生した「村民学」のひとつに、ふるさと学習が位置づいた。内容については学校支援部と担当教員が話し合いを重ね、村民憲章をベースとした9年間のカリキュラムが完成した。また、各学年の題材に合わせ、学校支援部が学年コーディネーターを選出し1名ずつ配置した。コーディネーターは、1年間を通し担任と共にふるさと学習を進める。後に学園職員の要望により各学年2名の配置となった。自然分野、伝統芸能分野、伝統的建築物分野などの専門家ばかりではなく、多くの村民と繋がりを持った方や移住者など、学びに合わせた様々な方が配置されている。4年生コーディネーターは、合掌造りに関する専門家であり、知識や技能を兼ね備えている。しかし、授業のなかでは、若い茅葺き職人から直接学び得る場を設定し、村の若者が子ども達とかかわる場を増やし、地域教育力向上にも繋げている。



図14 学年コーディネーターと打合せ

コーディネーター配置について教員からは、「子どもの学びの欲求に合わせた突発的な学習の方向転換にも対応していただけた。」「質の高い学びが出来、マンネリ化せず、子どもたちや担任の願いに合った授業展開が出来る。」など好評である。



図15 職人から直接学ぶふるさと学習

〈ちょいボラ・地域ボラ〉

保護者による学園評価のうち、「地域の中で子どもたちは清掃活動や作業などに取り組んでいる」ことが低評価だったことを受け、地域活動部では、地域の中で子ども達が参加出来るボランティア活動を拾い出す作業を行った。地区単位で行事や活動を調査し、子どもの受け入れ確認も行い一覧表にまとめた。「ちょいボラ・地域ボラ」と題して、子どもたちや保護者、村内全戸に配布し周知した。地区で活動する子どもたちの様子は画像で寄せられ、その姿は村広報などに掲載され、多くの村民に伝えられている。



図 1 6 地域から届いたちょいボラの姿

〈村民ラジオ体操カード スポーツ推進委員会〉

地域における担い手育て活動として、スポーツ推進委員会では夏休みに子ども会が開催するラジオ体操に注目した。子どもと大人のかかわりづくり、あいさつや声掛けの場として村民がラジオ体操に参加出来るよう、村民ラジオ体操カードを作成し全戸配布した。後に地域活動部がカードのデザインに加わり、あいさつやジャンケンなどでかかわりが持てる内容が加わった。ラジオ体操会場には、祖父母や独居高齢者、卒業生やその保護者などが見られ、子ども達からハンコをもらいながら楽しく会話をする姿がある。



図 1 7 村民参加のラジオ体操

〈子ども会夏行事 子ども会育成委員会〉

子ども会育成委員会では、計画から後片付けまで子ども達の力でやり切ることをめざした。これまで育成委員が多くを準備し手助けしてきたことを見直し、自分達の力で挑戦する場を増やした。各地区子ども会で毎年開催される夏行事は、後期課程生徒と育成委員の会議から始まる。これまで恒例となっていた内容も子ども達のアイデアで新しい活動に変更。片付けなども自分達で行い、その姿に育成委員は感心した。学園活動で身に付いた力が地域で発揮される場は少ない。地域の中でも自分達の力でやりきる事が出来てこそ、真のひとりだちの姿となる。そのためにも地域での価値づけ、大人の声掛けは重要である。



図 1 8 子ども会行事計画

〈雑巾縫い活動 女性会〉

女性会では、これまで会員のみで行っていた活動に子どもの参加を呼び掛けた。既存活動を無理なく工夫改善することで、部員の負担も大きくない。防火訓練として放水操作確認をする会に、親子で参加する部員の姿があった。また、雑巾縫い活動では、親子での参加や子どものみの参加があり、家庭で経験することが少ない縫物を地域の方から教わる場となった。雑巾は、診療所や保育園、学園へと配布され、自分が役立つことを実感することが出来、自己有用感の高まりにも繋がった。



図 1 9 女性会雑巾縫い

6. 「未来に向かう子」目線での見直し

令和3年度より学園経営全体構想に、育てたい資質能力として「先を読む力」が加わった。校長は、児童生徒の現状を見つめ、めざす「ひとりだち」の姿として、自分で自分の未来を切り拓いていく子をめざすことを打ち出した。そのための資質能力として、課題や目的をもち、解決や達成に向けてあらゆる方法を見つけ出し挑戦していく力「先を読む力」を育むことを位置づけ、学校運営協議会とその方向性が共有された。更に学校運営協議会では、コロナ禍の経験を経て、予測困難な未来に向かう子ども達には、村に限定せず世界を視野にした見方・考え方を育む必要性が話し合われた。これを機に、これまでの取組の見直しや更なる価値ある取組が進んだ。

6—1. 家庭・地域で育む力

「先を読む力」をより具体化し、家庭・地域も共通のベクトルで子ども達とかかわれるよう、育みたい具体的な資質能力について学校運営協議会で熟議された。多くの意見は、家族愛、郷土愛、思いやり、貢献、人付き合いなど「相手意識を高める」ことと、夢や目標をもち努力する力、諦めない根性、体力など「自己を鍛える」こと、更に、自己肯定感、新しい学力、興味関心、主体性、多様性、表現力など「自己を伸ばす」ことが上がった。

授業等で育まれる「先を読む力」は主に課題解決能力となるが、相手の思いを感じ取り行動することや、目的をもちアイデアを活かすことなどは、家庭や地域でも育め、学園が掲げる育てたい資質能力と一致する。

実働部隊となる部会では、これまでの活動を「相手意識向上」「自己を鍛え伸ばす」観点で見直し、ブラッシュアップさせた。更に、新しく家庭サポート部が位置づけ、より一層、家庭・地域の連携協働が強化された。

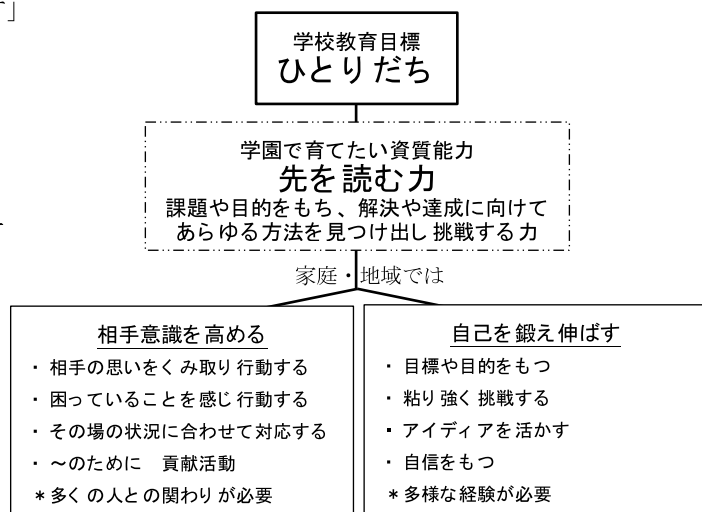


図20 育てたい資質能力について

6—2. ふるさと学習カリキュラムの見直し

平成29年に作成したふるさと学習のカリキュラムも、これを機に見直された。白川村は、自然や合掌造り、伝統芸能など郷土学習教材の宝庫である。更に後期課程では、村民の志や村の政策などに直接触れ、学び進める学習が取り入れられている。見直された点は、村の過去、現在を学ぶことが中心とされていることである。担い手を育む学びとして、伝統や継承は重要であるが、未来に繋ぐ「創り手」としての学びが更に重要となる。また、学年コーディネーターによりふるさと学習に多くの村民がかかわることになったことを活かし、大人も子ども達と共に未来を考える学習にしたいと考えられた。

5年生のふるさと学習では、これまでと同様の祭りや伝統芸能が題材となるが、「未来に繋ぐための不変と変化」を考えることがねらいに付け足された。子ども達は、どぶろくに注目し学び進めるなかで、古くから受け継がれる酒の製法や仕来りを知り、伝統継承の大切さを学び得た。しかし、祭り関係者から聞いた「人手が足りない」「人口減少は地域行事にも影響がある」の声に継承の難しさを感じた。そこで酒造りを研究する大学院生をコーディネーターが繋ぎ、子ども達と共に白川村の未来に繋がるどぶろく祭りの在り方を話し合った。その後、再度祭り関係者と話し合う機会を設け、変えてはいけないこと、変えていかなければ未来に繋がらないことを大人と共に考える授業展開となった。



図21 大学院生と未来について話し合う

6—3. 広い視野での「白川びと学」

キャリア教育として村民から生き方・考え方を学び得る「白川びと学」の内容も変化した。

コロナ禍で自粛期間が長く続いた頃、子ども達が村民から学び得る機会は激減した。それと同時に、一気に加速した ICT 活用により、場所に関係なく、容易に誰とでも繋がるのが日常化した。学校支援部では、未来に繋がる学びとして、子ども達が村外とも繋がることの重要性を感じ、これまで村民を講師とすることに限定していたことを見直し、村内外多くの方から学び得る「白川びと学」へと視野を広げた。更に「自己を鍛え伸ばす」具体的な姿として、まずは「自分の夢を語れる子」をめざし、そのための取組が進められた。

〈ゆめ動画〉

職業や趣味、生活など大人が夢を語る5分動画を収集。村民のみならず、都市部で活躍される方や大学生など、村内外様々なジャンルの方の語りをデジタル教材として収集し、白川びと学に限定せず、学園で自由に活用出来るようにした。学園に講師を招くことなく短時間で視聴出来、更に繰り返し視聴出来ることもあり、活用方法の幅は広い。声優に憧れる生徒が、村出身の声優の動画を iPad で持ち帰り、家族で視聴した事例もある。学校支援部では、毎年動画を増やしており、児童生徒からの要望（夢）にも応じた収集に努めている。

〈起業家からの学び〉

子ども達の視野に入る村内の職種は限られており、職業観について学ぶことにも限界がある。そのため、ゆめ動画の活用は重要であるが、やはり直接かわり学び得ることは最も大切である。ここ近年、村内で起業される方があり、村民データベースにも加わっている。教員から白川びと学の講師として起業家が要望されることが増え、子ども達に新たな職種を知る機会や、夢を抱く場として起業家を繋ぐことが増えてきた。更に、コロナ禍で完全リモートでの仕事となり、村へUターンした村民を繋ぐなど、子ども達がこれまで見て来た職種とは異なる新しい職業観を学び得る場が増えてきている。



図 2 2 起業家から学ぶ授業

〈Iターン・Uターン・逆Iターン〉

Iターン者・Uターン者・村内在住者の3名の対談で、「20年後自分は白川村に住んでいるか」を生徒達に考えさせたいと、教員から講師依頼の要望があった。しかし学校支援部では、「何を成し遂げたいか。（それにより何処に住みたいか）」に気づかせることが提案され、更に村内在住者ではなく、逆Iターン者への変更も提案された。帰村は目的ではなく手段であり、まずは夢や目的を語れる子を育てることが重視された。

逆Iターン者は、オンラインでの参加であったが、それぞれの想いが子ども達の心に十分届く価値ある対談となった。3者に共通する、目的のある生活（仕事）や、目的（夢）はいくつもあり何度でも変わること、また、目的（夢）のために今の住まいを選んだこと、更には、逆Iターン者の離れた村への熱い想いも知ることが出来、生徒達は自分の気持ちと照らし合わせながらじっくりと学び得ていた。



図 2 3 Iターン・Uターン・逆Iターンと対談

6—4. 家庭サポート部による自己実現に向けた「学欲向上」

令和3年度より新しく設立された家庭サポート部では、「自己を鍛え伸ばす」ために「目的（目標）をもち進んで学ぶ姿」をめざす取組を行っている。学園の家庭学習には、自主学習が位置づいており、児童生徒の主体的な学びを願って取り組まれている。しかし、与えられる学習が習慣

づいている子ども達にとっては、目的（目標）を持ち主体的に学び進める経験が少なく、保護者もそのサポートに戸惑っていた。そこで家庭サポート部では、「学欲向上」をスローガンに掲げ、子ども達のやる気を引き出し、自己実現の経験を増やす取組を進めた。

作成した「自己見つめシート」により、親子で自分の好きなことや得意なことをチェックし、自分の良さを家族で認め合う機会を設けた。更に、そのシートから1項目選び出し、目標を掲げ、達成に向けての取組を計画するシートも作成した。

子ども達、保護者、更に教員も計画シートを活用し、目標に向けた取組を実施、更に自己評価を行った。子ども達からは、「目標を具体的にすることで何を取り組めばよいのかが決めやすく、楽しく進められた。」

「夏休みの自主勉強も続けてやります。」といった声があった。保護者からは「やるべきことが明確になっていたことで、空いた時間に意識して取り組んでいる自分がいた。これは子どもに良い。」「今回は自分の好きなことで取り組んでいたが、これは学習でも出来そう。」といった声があがり良い成果となった。



図24 シートにコメント書きする家庭サポート部

7. おわりに

令和5年11月、白川郷学園地域公開日開催。多くの村民が来園し、教室は子どもたちの声と村民の笑顔で賑やかだった。子ども未来会議の場からは、未来に向かうアイデアをいきいきと話す子どもの声や、未来を見つめ責任をもった大人の発言が聞こえた。子どもから渡された大根を手に「こんなスゴイ大根、私は、よ～作らんわ。ありがとな。」と子どもの頭を撫でたお婆さんは、南部地区の方。「この間はありがとうございました。」と子どもから声を掛けられ首を傾げた若者は、ゆめ動画に協力した学生。自分達で育てた米を販売し売り上げに喜ぶ子ども達に「この額から苗代、肥料代などを差し引いて売り上げを考えてみろよ。」と声を掛ける保護者。これら全てが普通の光景として感じられる現在、学校運営協議会がもたらした大きな成果が感じられる。

「地区の子」目線の温かいかかわり、「学園（村）の子」目線の熱いかかわり、全ては「未来に向かう子」へのかかわりであり、それが担い手育てとなる。白川郷学園学校運営協議会は「子どもを核」とした未来に繋ぐ村づくりとして、凝り固まることなくこれからも前進し続ける。

「担い手」育てから「創り手」育てへと変化しながら。

注)

- 1) 本稿の内容は、白川郷学園等の各種資料を基に、構成されている。